

F-4 一般住民における中枢神経感作症候群と幼少期の逆境体験の関連に関する研究

¹⁾ 獨協医科大学 公衆衛生学

²⁾ 同 研究連携・支援センター

高野賢太¹⁾, 阿部美子¹⁾, 内山浩志^{1,2)},
高岡宣子^{1,2)}, 春山康夫²⁾, 小橋 元^{1,2)}

【目的】近年、慢性疼痛症などの原因不明かつ難治性の多様な症状を有する患者において中枢神経感作症候群 (central sensitization syndrome : CSS) が注目されている。CSSは慢性難治性片頭痛、線維筋痛症、慢性疲労症候群などの一部に関与しており、疼痛閾値の変化や疼痛感覚の分布の変化により、様々な身体症状・精神症状を引き起こすと報告されている。CSSのリスク要因はまだ明らかでないことが多く、本研究では一般住民におけるCSSの有無やその関連因子について、幼少期の逆境体験に注目し関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】本研究は横断研究を用い、栃木県のある自治体において20歳以上の住民から無作為に抽出した1万人を対象とした。対象者にCSI (central sensitization inventory) と逆境体験を含む質問紙票を郵送し、期限内に同意と回答のあった3,962人の結果が収集され、欠損を除いた3,539人 (男性1,755人、女性1,784人) を解析の対象とした。CSIのパートAスコアが40点以上/未満の対象者をそれぞれCSS該当群/非該当群とし、その背景にある関連因子について男女別に多変量ロジスティック回帰分析を行った。本研究は獨協医科大学生命倫理委員会による承認を受けて実施された。

【結果】CSS該当群は全体のうち6.4% (男性4.9%、女性7.8%) であった。年齢、生活習慣を調整した後の幼少期の逆境体験 (3項目) の有無のオッズ比 (95%CI) は、①事故や事件の体験では男性が0.89 (0.41-1.95) 女性が2.11 (1.24-3.61)、②本人の病気やケガでは男性が1.03 (0.58-1.83) 女性が1.35 (0.84-2.18)、③大切な人の死では男性が1.19 (0.74-1.92) 女性が1.19 (0.82-1.72) であった。

【考察】本研究の結果、一般住民の集団中の女性においては、CSS該当の割合が男性よりも高く、幼少期の逆境体験 (事故) がCSSの独立した関連因子であることが示唆された。一方で、逆境体験 (病気、死) では男女ともに有意なオッズ比は認められなかった。特定の診断がついていない一般住民の集団においては、個人の背景や生育環境を理解することでCSSの早期の発見・治療に繋がる可能性があり、今後のさらなる研究が必要と考えられる。

F-5 自閉スペクトラム症患者と統合失調症患者の自己申告による精神病症状の差異について

獨協医科大学 精神神経医学

山田桃歌, 菅原典夫, 川俣安史, 古郡規雄

【目的】自閉スペクトラム症 (ASD) の罹患者は、精神病症状を発症しやすく、統合失調症 (SZ) の罹患者と一部の症状を共有している。本研究は、初診時の患者を対象として、ASD、SZ、精神科診断のない受診者 (N-PD) について、精神病症状の分布の違いを検討することを目的とした。

【方法】解析データを、2019年6月から2021年5月までの獨協医科大学病院精神神経科の初診者の診療記録から後方視的に収集した。PRIME Screen日本語版による評価データを有する計254名の初診者を解析対象とした。なお、当院では、精神科の診断はすべてDSM-5の診断基準に基づいて実施されている。

【結果】ASD群、SZ群、N-PD群において、当惑と妄想気分該当する割合は15.6% (7/45)、41.5% (44/106)、1.1% (1/88) であり、知覚異常については11.1% (5/45)、40.6% (43/106)、2.3% (2/88) であった。傾向分析により、これらの精神病症状は、N-PDからASD、SZにかけて支持率が上昇することが明らかになった。多項ロジスティック回帰分析において、SZ群を参照として、ASD群あるいはN-PD群との比較検討を行った。年齢が高いこと、知覚異常に該当することは、ASDと診断されないことと関連し、男性であること、当惑と妄想気分該当しないこと、知覚異常に該当しないことがN-PDであることと関連した。

【結語】本研究の結果は予備的なものであるが、陽性症状の詳細な評価により、ASDとSZの鑑別が容易になる可能性を示唆すると考えられた。